琉球大学学術リポジトリ

米海軍第21工兵大隊The blackjackの翻訳ー沖縄最大の引揚港となった久場崎港の歴史（上）

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科 公開日: 2023-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 春菜 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019718

米海軍第21工兵大隊 *The blackjack* の翻訳
－沖縄最大の引揚港となった久場崎港の歴史（上）

中村春菜

はじめに

日本の敗戦後、海外にいた軍人・軍属と、「外地」や委任統治領に居住していた民間人の日本国内への送還が決定した。

沖縄への引揚げは台湾などから直接送還された事例もあるが、多くの人々（戦前日本本土に居住、あるいは戦時中に疎開していた人々を含む）は、引揚援護局を経由して帰郷した。

1946年（昭和21年）、沖縄において引揚港に指定されたのが久場崎である。久場崎には引揚げてきた人々を受け入れるためのキャンプ（収容施設）が造られ、受入れ業務が行われた。

久場崎は、故郷沖縄に帰ってきた人々がその第一歩を踏んだ場所であった。

（『中城村の沖縄戦　資料編』リード文、2022年、343頁）

戦後、沖縄へ引揚げてきた人数は約17万人といわれている。そのうち約10万人が中城村久場崎に引揚げたとされ、同地は沖縄最大の引揚港となった。現在久場崎の海岸に遺構等は保存されていないが、中城村が終戦50周年記念事業の一環で「戦後引揚者上陸碑」を建立した。「戦後引揚者上陸碑」は沖縄県内において唯一県民の引揚の歴史を刻んだ記念碑であるが、これまで私有地内に建立されていたことから、気軽に訪れることは難しかった。2022年２月、「戦後引揚者上陸碑」は付近の共有地（海岸沿い）に移設され、「戦後引揚者上陸碑」までの道案内板が設置されるなど足を運びやすくなった。引揚げは、戦前・戦中・戦後を一貫して考えることのできる重要なテーマである。しかしながら、引揚港としての久場崎にフォーカスした研究は管見の限り見当たらない。当該研究の手がかりの一つとして、久場崎港を浚渫した米国海軍第８旅団所属の海軍第21工兵大隊が記した部隊誌 *The blackjack 1944-1945* United States

Naval Construction Battalionsを紹介する。

部隊誌の存在は、読谷村長浜在住の仲村渠一俊氏によって、中城村教育委員会を通じて筆者にもたらされた。記して感謝申し上げる。

本部隊誌は、沖縄東海岸（特に中城・与那原・佐敷地域）の戦時中の様子や復興過程を知るうえで重要な資料になると判断したため、沖縄関係の部分を大学院の講義で扱った。よって、今後２回にわたって掲載する翻訳をまず現琉球大学人文社会科学研究科２年次の大田光さんが行い、筆者がそれを修正、最終的な校閲を現琉球大学法科大学院院生２年次のブレイン栗田映美さんに依頼した。一部細かな表現の訳出が困難な個所もあり、また専門用語の取り扱い方など、不慣れ不適切な部分もあるかもしれない。翻訳に関して、一切の責任は筆者にある。ご批評ご指摘賜れれば幸いである。

久場崎港の浚渫過程を紐解くため翻訳を試みた。ただし、それ以外にもこの部隊には、「神風特攻隊」の攻撃を受けながら工事していたこと、道路工事や側溝づくりは泥雨との闘いだったこと、亀甲墓が沖縄住民の避難地となっていたこと、収容された住民の洗濯の様子など、米海軍第 21 工兵大隊が滞在した約 7ヶ月間の様々な記録が多くの写真と共に記されている。これらの写真の多くは、沖縄県公文書館には収集されておらず、おそらく沖縄県内で所蔵している機関は他にないだろう。本翻訳が、多くの人の目に留まり、沖縄戦後復興過程の“０地点”を垣間見る資料となれば望外の喜びである。

なお、本資料は、次のウェブサイトにアクセスすることで誰でも読むことが可能である。

Naval History and Heritage Command　U.S. Navy Seabee Museum（海軍歴史・史跡部　米国海軍工兵大隊博物館）

URL:
https://www.history.navy.mil/content/history/museums/seabee.html?fbclid=IwAR1lHB9zq1IHvBYB-tq3Y3rOqHjf6QqQzLSvPPRUNECSABM93X28wTNshjs

久場崎が引揚港に指定された経緯

そもそも、なぜ久場崎が引揚港となったのだろうか。その経緯については「ワトキンスペーパー」の「沖縄人2万4,000人の送還計画」(1946年1月29日付)報告書に次のような内容が記されている。「引揚地候補としてブラウンビーチ(中城湾)、馬天港、金武湾が挙げられ、中でも指定港として最も可能性が高いのはブラウンビーチである」。ブラウンビーチとは中城湾のことで、ここでは久場崎を指すと思われるが、定かではない。この報告書をもってしても久場崎が引揚港となった経緯は不明である。今後、さらなる資料収集及び検討が必要である。

米海軍第21工兵大隊と久場崎港の浚渫

では、どのような経緯で久場崎港が浚渫されたのだろうか。実は、久場崎は引揚指定港として運用される以前、米国海軍第8旅団所属の第21工兵大隊(21stUnited States Naval Construction Battalions、以下21st NCBと略記)が積み荷卸しのために浚渫し設置した浮桟橋港であった。21st NCBとは、主に沖縄島南東部の港や側溝、道路建設等の土木作業に従事した大隊のことである[1]。時期によって異なるが350人～1,000人程度からなるユニットであった(図1参照)。21st NCBは太平洋を時計回りするようにハワイやサイパン等へ寄港し建設作業に従事したのち、沖縄に上陸した(図2参照)。日米の戦闘過程と21st NCBの移動は連動しているかもしれない。

---

[1] The 21st Battalion was soon to be inactivated. The Blackjack wanted a final word said. We approached our acting officer in charge, Lt. W. M. Harting, who was also the last of the original battalion officers. *The blackjack 1944-1945* United States Naval Construction Battalions,P.178

日時　Date	将　校 Officers	人　員 Men	権限　Authority
45／5／1	27	954	BNP625 ＆R
45／6／1	27	957	BNP625 ＆R
45／7／1	27	959	BNP625 ＆R
45／8／1	29	933	BNP625 ＆R
45／9／1		896	BNP625
45／10／1	34	717	BNP625 ＆R
45／11／1	16	323	BNP625 ＆R

図 1　沖縄上陸後の 21st NCB 人員表

(*Historical Information* 21st U.S. Naval Construction Battalion https://www.history.navy.mil/content/dam/museums/Seabee/UnitListPages/NCB/021%20NCB.pdf より筆者作表)

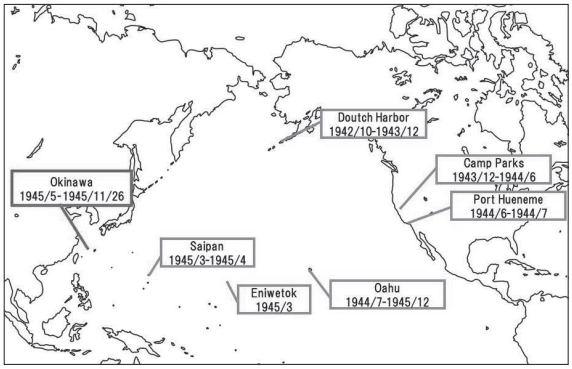


図 2　21st NCB の活動地及び時期

(*The blackjack 1944-1945* United States Naval Construction Battalions 扉の絵地図より筆者作成)

海軍工兵隊は Naval Construction Battalions と表記され、頭文字を取ってCBと略記されることが多い。その発音から工兵隊の愛称はSea Bees(海上の蜂）であり、今回翻訳した部隊の記念誌である *The blackjack 1944-1945*

にも海軍服をまとった蜂の絵が描かれている。なお 21st NCB は自らの愛称として Blackjack を多用しており、記念誌名もそれに倣っているのだろう。Blackjack とはカードゲーム「ブラックジャック」に因んでいると思われる[2]。部隊誌は、表紙と裏表紙を含め 191 頁あり、「ハワイ」や「サイパン」、「沖縄」など彼らが降り立った地域での活動が記されている。そのなかでも「沖縄」に関する項目は半数以上の 102 頁が割かれている。久場崎港浚渫過程以外にも、与那原港や馬天港、知名崎等の東海岸における浚渫工事の様子や久場崎・熱田の米軍駐屯地設備の設置工事、道路建設などに関する報告がなされている。住民の様子についても写真と共に記録されている。

久場崎港の浚渫に関しては数ページにわたって記載があり、その内容をかいつまんでみると次のような浚渫経緯であった。1945 年 5 月 4 日に上陸し、それから 5 日後には久場崎港の浚渫工事に取り掛かる。工事は、日本軍の「Kamikaze Attack」(日本兵による特攻) の恐怖と隣り合わせで行われた。6 月 15 日には全行程の仕事は終了してはいないものの、久場崎埠頭での業務が始まる。なぜこのように急がれたのか。それは、米軍が日本軍との戦闘において軍需物資を搬入するために拠点となる港が必要となったためである。

なお、このことは米軍に占領された沖縄で建設作業の優先順位が 1945 年 6 月段階では次のように定められていたものに関連すると思われる。

①暫定的な石油貯蔵庫　②道路の修理改修　③暫定的な荷揚げ施設
④衛生　⑤作戦上必要な飛行場　⑥初期通信施設　⑦対空防衛施設
⑧給水施設　⑨港湾清掃　⑩航海指標、係留ブイ
⑪捕虜、民間人収容所　⑫暫定爆弾弾薬貯蔵場　⑬暫定供給施設
⑭仕分け区域　⑮病院　　16 ～ 37 (略)[3]

部隊誌と照らし合わせると、このうち 21st NCB の動きと関連するのが②、③、⑧、⑬であった。

久場崎港は戦後約 10 万人の引揚者を受け入れ、しばしば引揚者の戦後復興

---

[2] 手持ちのカードの数字の合計が「21」を超えない範囲で「21」に近い方が勝ちというカードゲーム。

[3] 林博史「第二節　米軍基地建設」『沖縄県史　各論編 6　沖縄戦』631 頁

の第一歩の場所と表現される。

その前段は、沖縄戦時中、米軍が軍需物資を搬入し、闘いを有利にすすめるために浚渫された港だったのだ。日本本土の主な引揚港の多くが旧日本海軍の基地だったり、貿易港であったことと比べると、引揚港・久場崎の歴史は本土の引揚港と性格を異にしているといえるだろう。

※本稿は、文部科学省科学研究費補助金基盤（C）018K01973A 及び文部科学省科学研究費補助金基盤（C）522K01361A の助成を受けたものです。

“*The blackjack 1945-1945*“　翻訳文

前書き

1942 年８月 28 日、明るいバージニアの太陽の下で、白い海軍服を着た兵士 1000 人がブラッドフォード基地でパレードをした。この日及び式典は、第 21 をアメリカ海軍の常設建設大隊として就役することを祝うものであった。この日は、この部隊を遠く、聞いたこともない世界の地へと導く冒険の始まりであった。ベーリング海の凍った海水とアリューシャン列島の静かで過酷なツンドラへ。太陽が降り注ぐハワイの島々と、なじみのない異国の極西太平洋の海へ。

生まれ故郷のアメリカの町や州の名前しか知らない隊員らは、ウナラスカ、ダッチハーバー、アダック、アッツ、アトカ、アムチトカ、キスカなどの異国の地の知識で語彙を豊富にして、3 年間の冒険から戻ってくる。彼らは、故郷の町に隣接する谷よりも、ウガダガ峠の地形をよく知ることとなる。彼らは、古い知人のように真珠湾とパーリ語について昔話をし、ダイヤモンドヘッドとワイキキにまつわる物語を語り、知ったようにカーミナの言葉でワヒネの魅力を語る。エニウェトクは、彼らの目には、もはや遠い太平洋の地図の漠然とし

た場所ではなく、孤独で、風に晒され、戦いで粉々になった悲惨な珊瑚礁地帯である。そして、彼らはマリアナ諸島でのこと、サイパンの貝殻で穴だらけの崖と、ガラパン沖の湾での大護衛船団の組立ての話を持ち帰るだろう。

８月のあの暑い日に、白い服を着て行進していた隊員たちは、琉球が意味するところ、ましてその場所がどこかを知る者はいなかった。３年間の任務が終了するまでに、彼らは沖縄の暑さと悪臭、一人用塹壕の泥と恐怖を増す戦闘の音、神風特攻の突撃、爆弾と砲弾の裂ける音、負傷者のうめき声と死者の静寂を嫌というほど知ることになる。

その記念すべき日に隊列を組んだ隊員の行進は、アメリカ全土の断面を構成していた。ここに、アメリカの生活様式を可能にする我々の労働者、国家の建設者、エンジニアと機械工、ありとあらゆる職業の職人がいた。大工に配管工、電気技師に溶接工、画家に施釉工、機械工、製鋼所職工、杭打ち工、測量技師、製図工がいた。大型土工機運転手、トラクター運転手、ショベルにクレーン機運転手、掘削機運転手に爆薬取扱者、そして自動車整備士と重機の修理工。そうだ、そして我々の料理人にパン職人もだ、そして我々の簿記担当と会計士、床屋と仕立屋、そしてなくてはならない、我々の衛生兵。

隊員は行進し、パレードの後、彼らの白い制服は片づけられた。これ以降、彼らは、100 もの全く異なる仕事に就き、設営隊のダンガリーとワークグリーン色の作業着を着て、遠く離れた 12 の港に行く。そして彼らと彼らの努力のおかげで、船は安全な場所を見つけ、補給品を移送することができ、航空機は離着陸ができ、部隊は食と住む場所を得ることができ、艦隊のあらゆるニーズすべてを満たすことができた。彼らと、他の大隊の仲間のおかげで、戦争は展開し、最終的かつ必然的な勝利に向けて加速し続けた。

８月のあの日、数日前はまったく見知らぬ者同士であった隊員は、観閲行進した。あらゆる気候、あらゆる天候、駐留地、船上、仕事、兵舎で共有された経験、同様に共有された危険と困難、共に知ったすべての良い時と悪い時は、生涯続く固い絆をもたらした。

３年間、隊員は、自らの個性、彼ら自身のやり方、彼らの性質そのものを「海軍式」と呼ばれる漠然とした手法に合わせた。それは、物事を成し遂げるため

の最も効率的で最も厄介な方法である。それは、絶望的な混乱と論理的手順が入り混じった集合体であり、大量の無駄を伴う健全な経済であり、階級機能不全と熟練者の成果、優れた結果をもたらす訳のわからない方法である。３年間、海軍式に触れた隊員は、絶望の澱を飲み、人生のワインといえる日々を最大限に味わった。彼らは人生の最悪と最高を見た。これだけ経験した隊員が、元の自分に戻ることは決してない。これが第21の隊員である。

これが私たちの物語である。これが、第 21 米海軍建設大隊、第 21 設営隊、Blackjacks の物語である。これは、日本の敗北への道を築き、戦闘を支援した千余りの隊員の一団のひとつである。私たちはたった 1 つの大隊であり、何千もの大隊と何百万もの男女がわれらの軍隊を構成していた。戦争の歴史全体の中では小さいかもしれないが、我々は、仕事は素早く片付けるぞ、「できるぞ」という気概を持って仕事がなされるよう気をつけた。

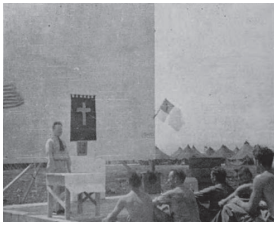
これらの言葉と写真は、主に私たちの２回目の海外任務、つまり中央太平洋と西太平洋での任務に関するものである。この前には、アリューシャン列島での最初の「クルーズ」があった。

P72　目的地を狙う

復活祭の日（４月 1 日）に沖縄に侵略して、我々は第 21 大隊が作戦に加わる運命だと知った。ホロウェイ牧師は、沖縄の様子についての話題を５つ、夕方の映画の直前に話しきかせた。軍諜報部は沖縄の病気について厳しく警告し、毒蛇と悪天候が見込まれた。我々は“目的地”が楽しみではなかった。

多くの軍の訓練は実際の戦闘を体験させるために荒く、すぐ近くで手榴弾が爆発し Blackjack の１名が入院したが、すぐに回復した。偵察とパトロールに重点が置かれた。

船からどさっと降ろされたため、我々の補給品と機器はごちゃごちゃになっていた。セルフサービスの“確保“により、大事な材料がとられた。サイパン滞在期間を通して、我々の主な仕事は、居住地区を整え、どこに何があるのか把握し、必要な場所に用意することだった。



ホロウェイ牧師は復活祭の早朝礼拝を執り行った。同じ時、アメリカの軍隊は沖縄を侵略していた。

目的地への出発に向けて、我々の居住地区を整えて使える状態にする必要があった。

P73

サイパンの絵のように美しい湾は侵略の出発点となった。

沖縄作戦の序盤は想定よりも早く進んだ。上陸への抵抗はわずかであった。なるべく早く来るよう我々に呼び出しがかかった。我々は居住地区内で急いで作業を行った。我々の衣服には発疹チフスを含むシラミの予防薬を染み込ませ

られ、腕には再度ワクチン注射を打った。

それから LST で待機する期間があり、遂に 4 月 18 日に、700 人の Blackjack(我々の第一部隊)がサイパンの船着場から 3 隻の LST に乗り込んだ。大隊の残りは、数週間後に到着する大量の船荷を処理するために留まった。

P74　LST は沖縄へ

サイパンから沖縄へ LST で向かう船旅が最も楽しかった。

食べ物はこれまでで最高であった。

準備は整っていたものの、輸送隊は 4 月 22 日までサイパンを離れなかった。航海は今までで最も快適なものとなった。一隻あたり隊員がたった 250 人ほどで、たくさんのスペースがあった（装備の上下周辺に）。食べ物は船に乗って食べた中で最高で、ほぼ毎朝目玉焼きがでた。船員は愛想がよく、海は平穏だった。

我々の護衛が潜水艦の音を受信したときには若干の興奮があった。護衛は走り回って爆雷を落とした。LST はコースを変え、2 隻は混乱の中かろうじて衝突を回避した。最後には、大きい爆発と浮遊する破片が、潜水艦が沈没したと

いう十分な証明を与えた。

旅の主な難点は、我々が西に向かっていて、故郷から遠ざかって、初めて本当の戦争に行くということだった。我々は将校の忠告とアドバイスに細心の注意を払い、上陸地点で戦闘をしなければならないかもしれないという、最悪の事態への準備が出来ていた。

P76 「ARRIVAL」到着

沖縄の緑の丘は美しく十分平和に見えたが、海軍の大砲は沖合から内陸を砲撃し、野砲の轟音はほぼ鳴りやまなかった。空襲警報は頻繁にあった。日本は神風攻撃に全力を傾け、我々の艦隊は船舶と人員に大きな損失を出した。

４月 29 日、LST３隻は金武湾（「Chimu」とは湾を意味する―ママ（筆者注））に停泊した。そこは島の東側の真中ほどにあった。船の爆破を試みる日本軍の水兵を監視するため、夜間の船上警備員は２倍になった。

次の日、我々は旋回して中城湾に入った。中城湾の岸辺は我々が多くの月日を過ごす運命の場所だった。２、３の軍艦を除いて、大きい湾はほとんど空だった。

我々は目的地に到達した。サイパンから1200マイルかけてやってきた。我々

の航海経路で測ると、アメリカから 7000 マイル以上離れていた。我々は、上海からはわずか 450 マイル、日本の九州からは 360 マイル、そして東京からは 845 マイルの場所にいた。「東京からの一投石」（訳者注＊神風特攻隊の攻撃のことと思われる）が沖縄のラジオ局の自慢であった。

沖縄島の全長はおよそ 65 マイルである。日本本州から台湾まで南西に連なる島々である南西諸島、もしくは琉球列島のおよそ真ん中に位置している。列島の中でも最も大きく重要な地点で、日本の東南アジアへの海上供給ラインの防衛の場で、北西への連合国前進のための踏み石として抜擢された。我々は沖縄に到着する際、重要な作戦に参加していることは分かっていた。我々はこの作戦が日本の敗戦にとってどれほど決定的となるか、日本の敗戦がどれほど間近であるかには、気付いていなかった。

P77 「UNLOADING」荷を降ろす

５月１日（沖縄戦が始まってちょうど１カ月後）、我々の最初の LST が湾の北西岸の干潟であるブラウンビーチで荷降ろしを始めた。他の２隻の LST は５月２日に同じ場所に乗り上げた。我々が到着した時、“Tokyo Rose(東京ローズ)”が第 21 大隊の歓迎を放送したとのことだったが、我々にはどうでもよかった。

船の荷を降ろすために、水と雨と泥の中で働かなければならなかった。１日に２回潮が引く時だけすばやく仕事ができた。車両は熱田集落近くの野営地まで走行し、トラックの積み荷が降ろされると、また次の積み荷のために船に戻った。多くの BlackJack は岸までオイル樽を浮かせて、押し転がすという骨の折れる仕事に就いた。５月４日には荷降ろしが終わった。

P78 「THE FIRST DAYS」初期

数日間、BlackJack は野営が可能な場所で投宿した。ほとんどは小型のテントで、何名かはトラックの中で眠り、数人は民家を試した。出来るだけ早く 16×16 の標準的なテントを張ったが、それでも我々は濡れたし、居心地は悪かった。

仮の調理室が急造されたが、ホットコーヒーとK号携帯食に限定された。我々はK号携帯食がなんとも嫌いになった！あの冷たい、缶詰のハムエッグ、チーズ、ポーク、牛ローフ、硬いクラッカー。これらはしばらくの間は問題ないが、数日後には間違いなく不味くなる。数人が携帯食を温めたところ、温めた方がましだということが分かった。

我々は作業場を組立て、熱田集落の廃墟を片付け始め、建物の多くを取り壊し、そして我々が使用するために一部は修復した。記念品は至る所にあった。

大きなテントが立つまでの間、山腹の野菜畑に張られた「小型」のテントで眠りながら、蛇を心配した。

一つ目の調理室ではホットコーヒーと冷たいK号携帯食が配られた。

P79

上陸して三日目の夜、東海岸で日本軍に度肝を抜かれた。彼らは後方支援任務に混乱を来たそうと、我々のビーチに小型上陸用舟艇で部隊の着陸を試みた。陸軍と海軍は対応する用意ができており、全滅させたが、強烈過ぎた。

敵軍機が頭上を飛ぶので、我々の上空はたびたび対空砲火でいっぱいになっ

た。我々はすぐ、爆弾が落とされる可能性よりも対空砲の破片が落ちてくることを恐れるようになった。ある夜、敵の爆撃機が接近する中、民家が火事になった。我々のブルドーザー操作員１名が、勇敢にも設営隊のお気に入りの武器を用いて瓦礫と土を炎にかぶせた。

最前線に続く 13 号線道路は我々の駐留地の真横を通った。我々の南側は第 74 陸軍野戦病院だった。負傷者は最前線から直ちに救急車でここに運ばれた。疲労した者を下げ、補充兵を戦闘に送るトラックが行き来していた。我々自身の状況が厳しいときでさえ、我々は戦闘部隊でないことを幸運に感じた。

補給品が居住地区に積み上げられるにつれて、斜面が駐留地らしく見え始めた。

陸軍が連れ去るまでは、馬勒をつけていない現地の馬が気晴らしだった。

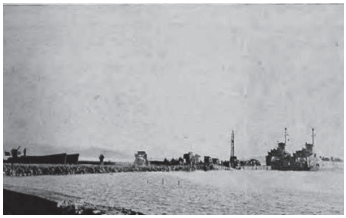
P80「KUBA SAKI PIER」久場崎埠頭

LST が干潟に滞留するなか、我々の測量士は一つ目の浮桟橋を敷設した。

我々が上陸して５日後、海岸での重要な仕事の一つ目に取り掛かった。それは久場崎の LST 用波止場で、裾野状に広がる珊瑚礁が岸の近くまできている場所だった。二つの進入口によりＵ字の形をした 600 フィートの浮桟橋は、ほんの数マイル南の最前線へ送る補給品を荷降ろしするために至急必要であった。

測量がなされ、近隣の水田の水が排出され、盛り土は久場と泊の破壊された村から運ばれ、進入口は高さをそろえたうえで盛り土がなされた。区域の浚渫がなされ、珊瑚は吹き飛ばされ、係船柱は打ち込み及び固定された。浮桟橋部分が組み立て及び設置された。

６月 15 日までに全ての作業は完了しなかったが、作業を開始してから２週間後に最初の LSM が埠頭を使用した。仕事は常に押していた。ある日とても近くに爆弾を落とされたので、日本兵は私たちの進捗を見たに違いない。沖縄作戦の終盤には、埠頭は最前線に補給品を流し込んだ。戦闘の後は、埠頭は基地の建設に不可欠であり、そして戦争が終わった後は、復員プログラムのもと帰途に着く人で埠頭はいっぱいになった。岸辺の船を打ちのめし、多くの埠頭を破壊した大型の台風でさえ、久場崎埠頭の使用を妨げることはなかった。



（左）作業を開始して 12 日後には久場崎埠頭の第一デッキが使用された。
（右）５月 19 日に LSM は積み荷を降ろした。

P81

（左）　５月 17 日、日本軍の爆弾の破片が浮桟橋の一部に穴をあけた。
（右）そして溶接機械を突き破った。幸運なことに怪我をした Blackjack はいなかった。

埠頭の先は戦争の補給品を荷降ろしする船でいっぱいだった。

P82

停電と空襲を除いて、久場の埠頭は一晩中灯火されていた。満月が錨で固定された船を照らし出していた。

LSTは埠頭を使用した。我々は杭材をU字型の中に保管した。

P83 「PONTOON ASSEMBLY」 浮桟橋の組立て

浮桟橋の各区分は両側面に溶接して繋ぎ止められたヒンジで固定された。

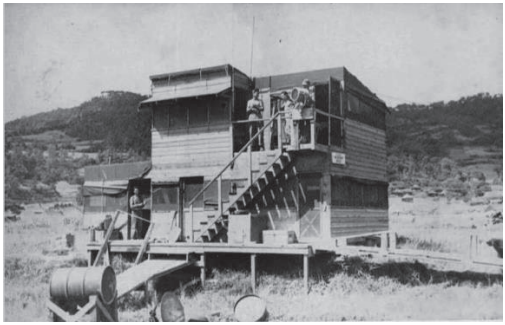
埠頭を作るために、我々はたくさんのフロートを必要とした。LST は各２ × 30 の堤道を２つ持ち込んだ。海上用曳舟はピギーバック式で組立品をグアム、ときにはアメリカから曳いてきた。我々の船員はこれらの組立品を湾で受け取って、ブラウンビーチに停泊させるため牽引した。我々の海岸の組立場は久場崎港の横に位置していた。

Blackjack（隊員）は要求された形とサイズにフロートを組み立てた。作業は日夜続き、攻撃を受けやすい位置だったので空襲の間はしばしば危険だった。

強風は厄介だった。ときには３トンの錨でさえ持ちこたえられなかった。そして海が荒れているときは、重い組立品の対応をするのは危険だった。我々は島の東側唯一の浮桟橋組立て部隊だったが、我々の工事と同様に他の工事についても迅速な工程が求められた。

フロート組立場の船着場は船舶とはしけ船に取り囲まれていた。

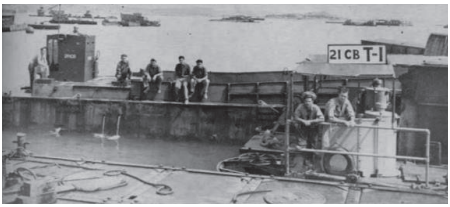
P84



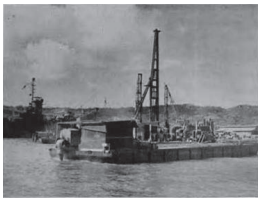
オフィスから視覚信号で船舶とはしけ船を誘導した。ロッド・アンド・リール・クラブにて。

『Water front（ウォーターフロント）』の船員は島の東側に必要であったフロートの組立てを記録的な速さで行った。

P85「BLACKJACK FLEET」 Blackjack艦隊



上の写真「LCMも艦隊の一部でもあった」



上：馬天港の桟橋に縛られた第21大隊のはしけ船。

下：スカジット社のウインチを載せたはしけ船の船員たちが曳航を担当した。

船舶から我々の現場、そして我々の現場から現場へ機器と補給品を運び届ける小型船舶、フロートはしけ船、そして曳舟からなるグループ「第21艦隊」（自らの曳舟グループのことを、敬意を込めて、『艦隊』と呼んだと思われる。―筆者注）なしでは、我々の海岸での仕事は全て止まってしまったはずだ。数週間を除いて、貨物船はバックナー港（現 馬天港―筆者注）に船を着ける場所がなかった。我々の艦隊は岸から船への絶え間ない行進の一部であった。

船員は自分らの成果を誇っていた。浮桟橋の上で食事と睡眠をとり、そこで生活した。昼夜問わず彼らは仕事のために呼び出されがちであった。他のどの

Blackjack よりも空襲には無防備であった。嵐の間、なんと台風のときでさえ、多くの船員が機器を守るため命をかけた。

艦隊を運営するうえで不可欠なことは部隊間のコミュニケーションだった。視覚信号があり、そして我々は“Innertube One”と“Innertube Two”の呼び出しで短波無線局を持っていた。

・下の写真 Blackjack 艦隊のはしけ船は埠頭作業場に向けて湾を横断しフロートの組立品を運んだ。

P86「DIVERS」潜水士

船員はたびたび危険なまでに長時間働いたが、彼らはよく、荷降ろしを手伝った船の新鮮な食糧を食べた。

ハイトマンは200ポンドの深水スーツを着た。

潜水士もまた海岸作業に不可欠だった。Blackjack の潜水士は水中作業を要する場所にはどこへでも、現場から現場へと移動するはしけ船から潜って作業を行った。彼らの仕事には、西太平洋の海の明るい色の不思議な魚を見られる特権があった。

サイデンバーグが浅瀬用ダイビングマスクを外す様子。ムース・コチンスキーが潜水士６人の『大将』だった。

P87「ROAD TO FRONT」前線への道

掘削機のトラクター側半分は 13 号線の深い泥に消えてしまった。

我々が上陸した時は、日本の海岸道路は牛の通り道程度のものであったが、それでもその道を数マイル南へ続く戦場への多数の往来に使わなくてはならなかった。５月８日、我々は東海岸の主要道路になる 13 号線の改修工事を始めた。この仕事中、我々は有名な「泥の大将」がどれほど強力か学んだ。

13 号線は第 21 大隊により建設・整備された。

５月の頭は、穴埋め、そして拡幅とむら直しが主な仕事だった。サンゴの盛り土の多くは新しい採掘場から入手した。すると、５月 24 日と 25 日の豪雨により、路面が柔らかくなり始めた。サンゴの盛り土が流れ、船員はシャベルで排水溝から除去した。常時、軍の交通の整備は重要だった。

P88

当番３人がシャベルで水を排出し、最前線への供給道の穴を埋めた。

豪雨による雨水を排出するために、広幅の、深い排水溝が掘られた。

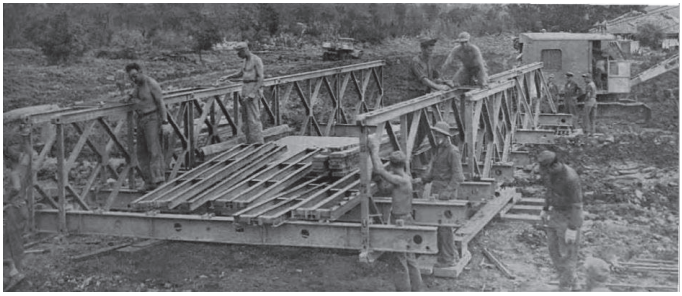
左：多くの場合、爆破は溝を掘る最も効率的な方法だった。
右：時々“ドカン・ドカン”部隊は 13 号線から湾まで水田を通る水路のため、一筋の伝播型爆薬を用いた

27 日、我々は通行可能な道を維持するために無休で仕事をするようになった。そして 31 日にはこの道路作業は他の全ての作業に勝る最優先事項となった。戦闘員には補給品が必要であったし、負傷者を野戦病院に移送しなくてはならなかったし、前線はひどい状態であったため多くの補充兵を前線に移送する必

要があった。

激しい雨と軍の往来が続いた。６月３日には、トラクターは酷い箇所に道路を引かなければならなかった。

P89



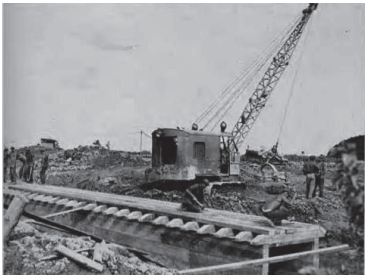
設営隊員はいくつかの低地にベイリーブリッジを採用し、陸軍のより熟練した工兵と同等の速さで組み立てた。

いくつかの穴では水深が３フィート半あった。水路は排水のために爆破され、水田にダイナマイト炸薬を敷く火薬部隊はよく腰まで泥に漬かっていた。道路の線形の一部は変更された。そしてついに、13 日間続いた豪雨により、泥は手に負えなくなった。交通は止まってしまった。

仕事は絶え間なく続き、そして雨が止んだ。トラック、トラクター、クレーンとショベル、モーターグレーダー、キャタピラとキャリーオールを組み合わせたもの、エアーコンプレッサー、モーター溝堀機、掘削機の全てが稼働した。我々は、最も激しい戦闘と最終的な勝利を得た 59 日間、13 号線を整備し、重量木構造、フロート、石油樽で出来た 15 の暗渠を設置し、道路を珊瑚、岩や瓦礫で 33,000 立方ヤード埋め立てた。我々は素晴らしい道路となる基礎を築いた。

７月５日、我々は島の南へ移動を開始するにあたり、最悪の状況下で最善を尽くしたという認識のもと、13 号線の整備をもうひとつの設営部隊に引き継

いだ。



・左：重量木構造で暗渠が路面下の溝のいくつかを覆った。

・右：現地のお墓は道路の拡幅や線形を阻んだ。

【参考ウェブサイト】

・Naval History and Heritage Command　U.S. Navy Seabee Museum（海軍歴史・史跡部　米国海軍工兵大隊博物館）

https://www.history.navy.mil/content/history/museums/seabee.html?fbclid=IwAR1lHB9zq1IHvBYB-tq3Y3rOqHjf6QqQzLSvPPRUNECSABM93X28wTNshjs（2023年1月11日参照）

【参考文献】

・林博史「第二節　米軍基地建設」沖縄県文化財課史料編集班編『沖縄県史　各論編6　沖縄戦』沖縄県教育委員会、2018年

・中城村教育委員会『中城村の沖縄戦　資料編』2022年

・Records of the U.S. Civil Administration of the Ryukyu Islands (USCAR) 1945-72